

## 67 近代医学への道を歩んだ西井格太郎の履歴

西井易穂

医制七六条は明治七年長与専齋によって施行された。

この医制にいち早く対応した青年が三重県度会郡柳村にいた。

最近、演者は私の祖父「西井格太郎の履歴画」と顕彰碑を詳細に検討する機会をえて、その内容が日本の近代医学史上、貴重で、興味深いものであることを知った。

格太郎は安政三年八月二十四日 医師西井道仙の五男として生まれ、伯父久留精義の支援と指導を得て極貧と戦いながら、明治十五年五月眼科学の医師国家試験に合格して、帰京し、山奥の柳村で眼科の医師として地方の医療に貢献した。その名声は奈良、大阪に及んだ。

現存する履歴画は絵師呉川（川口寅太郎、四条、円山派）により描かれた物で、一匁二十二×三十二で二十二

駒からなる。その巻物の中に佐藤進と一緒に手術を行っている絵が存在する。また、順天堂医院手術傍観録二冊が現存することを発見した。

これは現在順天堂大学医史学研究室所蔵の富岡専一の著したものと一冊目は全く同じであるが、二冊目の記録は富岡の傍観録には記述されていないものである。その中には当時の新薬アンチピリンの治験成績が詳細に記録されている。

明治元年格太郎は久留家に丁稚奉公に入り、明治二年には宇治山田医学学校の創立者西川市令の門に寄宿し古文真宝の素読を受けると共に、調剤の仕事を手伝っている。明治四年には齋宮村の蘭学者高木蔵人に蘭学を学ぶのであるが、明治五年に松阪に英語学校が設立されたので、外人から直接英語を学んだ。

このように一人の少年が時代の動向にいち早く対応出来たのは伯父久留精義の意見が強く影響を及ぼしたのであろう。

専齋の示唆に端を発して、緒方洪庵の弟子古田杏輔らの努力で二見に明治十五年日本最初の海水浴場が開設さ

れた時、開浴の祝辞を述べたのが当時の度会郡長を務めていた久留精義である。このような伯父を持ち、気に入られていた格太郎に日本の近代化への情報をいち早く伝えたであろうことは十分考えられる。明治十二年に格太郎は精義の長女つゆと結婚している。

新医制施行と同時に開校された三重大学の前身三重県医学校で物理、化学を明治九年に、解剖学骨韧带筋論乃部を明治十年に卒業したが、師広瀬玄周の教育に満足せず明治十三年に借金をして上京した。この時の経済的援助をしたのは、西井家から松阪の小津家へ養子にでていた長男の清左衛門であった。

格太郎は東京医学校、東亜医学校に学んだ後、順天堂医院で佐藤進に外科学を二年間学び、同時に眼科医の権威井上達也に学んだ後、眼科学の医師国家試験を受験し、合格した。その詳細な記録は浜松町の公文書館に保存されている。

また、帰郷後、診療の傍ら、私塾修来館を開き、小学校に四書を寄付するなど、村の青少年の教育に貢献した。更に、明治二十七年には県下で蔓延した赤痢の防疫に

貢献した。

格太郎の青少年時代の人間性を築き上げた要因は貧困との戦いと禅の修養に基づくことが、この履歴画から読み取れる。特に明治三年から二年間ほど度会郡宮古村神照山廣泰寺に寄宿し、佛覚和尚に四書を学んだときの禅の修養の影響が強い。その経歴から禅師として永平寺八十四世森田悟由の教えを受けるとともに、悟由禅師から戒名を与えられている。そのほか由利満水、西山本山、小辻碩汀などからも禅の教えを受けている。

享年 大正三年三月二十五日

戒名 天寿院正受清格居士

(H H M 研究所)